Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-10-31

〈測定〉の社会学 : ケトレーとブース(1)

小池, 利彦
平野, 亮

(Citation)
鶴山論叢, 10:91*-115*

(Issue Date)
2010-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81002084

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002084

〈測定〉の社会学 ――ケトレーとブース(1)

Sociology of Measurement: from Quetelet to Booth (1)

小池　利彦・平野　　亮
Koike Toshihiko / Hirano Ryo

【キーワード】
測定、社会統計、社会学、実証主義

【Key Words】
measurement, social statistics, sociology, positivism

【要旨】
本稿は、19世紀に出現した「社会に関する学」（即ち社会学）を、〈測定〉というパースペクティヴにおいて捉え直そうとする試みである。18世紀において「表（タブロー）」（フーコー）の形で体系的に纏め直された「知の技法」＝〈測定〉の術は、19世紀において〈社会〉という分析媒体を介入させることで決定的な変容を来たした。そのことを西欧思想史の文脈において証明するために、二人の人物を取り上げる。まずは「近代統計学の父」とも呼ばれる19世紀ベルギーの学者アドルフ・ケトレーの社会物理学を取り上げながら、〈測定〉に基づいた19世紀中葉における〈社会〉に関する“知”の組み立てについて考察する。続いて19世紀末ロンドンの社会調査で有名な実業家チャールズ・ブースを取り上げ、彼の方法論のエッセンスが〈社会〉の分析と切り離し得ないものであったことを指摘する。そして最後に、彼らの思考を19世紀という文脈の中に同時に置いたときに明らかになる、〈測定〉の実相が、〈社会〉概念と深い繋がりを持っていることを証明する。

第一節　〈測定〉と“知”

フランスの思想家ミシェル・フーコーが「18世紀には表（タブロー）は、権力の技術の一つであると同時に知の手段の一つである」[1]と論じた通り、鳥瞰的な全体像の把握と、全体を構成する各要素のデータ化とによって対象を整理・理解する方法が、

近代の西洋世界では勃興する。力学や天文学などの自然科学から政治の世界まで、広く積極的に採られたこの戦略は〈測定〉という方法論に基づくものである。本稿はこうした観点を軸に、19世紀に出現した「社会に関する学」を、〈測定〉というパースペクティヴにおいて捉え直そうとする試みである。

ここではひとまず〈測定〉を、ルールに従い対象に数値を与えることによってその対象を認識しようとする活動として、とりわけ近代において“知”を生産するために欠かすことのできない方法論として定義しておこう。「絶対温度」の概念を創案したことで有名なイギリスの物理学者ケルヴィン卿の言葉として「もしあなたが測定できないならば、あなたの知識は貧弱である」というのが伝わっている[2)]。近代科学の「進歩」が、測定法の精巧化と歩調を合わせて起こってきたと言われている中[3)]、近代を牽引してきたのが科学であるとする前提の上に、（いささかフーコー主義的な枠組みではあるが）“知”の生産と独占が近代ヨーロッパ啓蒙の主要な制作物であるという仮定を組み合わせるならば、〈測定〉こそが近代を形作ったということもできるかもしれない。

“近代科学の〈測る〉”は、人間（man）を科学的に把握しようとする際、測定の対象として、とりわけ身体に執着していた。例えば17世紀から18世紀にかけての人相学・観相学（physiognomy）や人類学・人間学（anthropology）は、顔や頭部をはじめとした人体の各部に熱い眼差しを向け、長さや角度などをそこかしこから“切り出した”のである。一例、オランダの医師ペトルス・カンパー（1722－1789）が提出した図が有名である[4)]。そこにはサルからヒトへの漸進的な変化＝進化が、横顔に読み取られた垂直線と額－顎線分とで生まれる角度で表されていた。即ち、“知能の角度”という指標である。

このような研究は、一見すると力学などの自然科学（natural science）とは異なるが、実際のところ、これもまた「自然科学」であったと言うことができる。なぜなら、顔や身体に見出された幾何学的な図形や数値とは、その人間の本性＝ネイチャー（human nature）が記述されたものだったからだ。換言すれば、17世紀のトマス・ティム（1620没）が、聖書とともに神が人に与えた「書物」として論じた「自然（nature）」を[5)]、人間の中に発見し、〈測定する〉ことによって読み解く行為に他ならなかったのである[6)]。

その意味で、18世紀までの科学は、その時代がいかに「近代」として区分されるものであったとしても、一種の「神学」に他ならなかったのであり、その意味で〈測定〉は客観に開かれたものでは必ずしもなかった（いや、“西洋の認識世界（科学）において、「全き他者」としての神こそ客観性の根拠である”との議

論もあるかも知れないが、ここでは措く[7])。ただし、すでに17世紀に、神学を超えうる視点が提出されていることもまた事実である。

> 哲学は、眼のまえにたえず開かれているこの最も巨大な書〔すなわち、宇宙〕のなかに、書かれているのです。しかし、まずその言語を理解し、そこに書かれている文字を解読することを学ばない限り、理解できません。その書は**数学**の言語で書かれており、その文字は三角形、円その他の幾何図形であって、これらの**手段**がなければ、人間の力では、そのことばを理解できないのです[8])。

上の文章は、国際天文年の昨年（2009年）、ますます注目を集めているかのイタリアの物理学者ガリレオ・ガリレイ（Galileo Galilei, 1564－1642）の著書からの引用である。一般的に、科学史ではこのガリレイの言葉を、科学の歴史の画期であると位置づけている。ガリレイは先に引用したトマス・ティムの同時代人であり、彼もまた、この世界（宇宙）を「書物」に準えていた。ここまでは同じである。しかし彼らの思考には決定的な転換が存するように思われる。それは「書物」のシニフィアンに関わっている。

そもそもキリスト教会に反抗する気など毛頭無かったガリレイからすれば、神の存在は必然であり、彼はその恩寵を記述しようとしただけだったのかもしれない[9])。しかし彼の記述自体がその意図を裏切っている。上の引用から看取できるように、ガリレイの記述体系は数学であり、幾何学であり、さらに重要なことに「手段」であったのだ。そこには神学の軛から漏出する近代の思考方式を感じさせるものがある。

「神」は消えたのではなく、「単に「ないものにしておく」という形で棚上げ」[10]されただけなのかも知れない。だがいずれにせよ、科学史家の村上陽一郎の論に従えば、理論的な「17世紀科学革命」（バターフィールド）に対して、18世紀には科学の「形而上学的な枠組みの変化」＝「聖俗革命」が起こり、「知識論は〔「神」を介さず―引用者注〕人間と自然との関係の中だけで問われるように」[11]なったのである。

“世界は脱魔術化された”。そしてここでの“知”の手段、それは取りも直さず〈測定〉のメトニミー（換喩）なのである。

ただし、その“知”の手段が今日的な意味で完成するのは、さらに時を経た後のことである。18世紀において「表」の形で体系的に纏め直された「知の技法」＝〈測定〉の術は、19世紀において決定的な変容を来たす。そこに出現してくる

「消滅する媒介者」[12]は「社会」という媒体であった。したがって以下の構成は大略、次のようになる。続く第二節では、19世紀ベルギーの学者アドルフ・ケトレーによる「新興の科学（science nouvelle）」を取り上げながら、19世紀中葉における〈社会〉に関する“知”の組み立て（assemblage）について考察する。そして第三節では、19世紀末イギリスの社会調査で有名なチャールズ・ブースを取り上げ、彼の方法論のエッセンスを抽出する。そして第四節では、彼らの思考を19世紀という文脈の中に同時に置いたときに明らかになる、〈社会〉と〈測定〉との深い繋がりについて論じる端緒としたい。

第二節　ケトレーの〈測る〉社会学

〈測定〉の社会学を考察する上で、ベルギーの天文学者アドルフ・ケトレーは外せない。ランベール＝アドルフ＝ジャック・ケトレー（Lambert Adolphe Jacques Quetelet, 1796－1874）、フランス革命動乱の秋を経て独立を果たすベルギーの草創期を、学術面・行政面でリードした彼は、しばしば「近代統計学の父」と称される[13]。そして、統計的手法を以て彼が測り知ろうとしたものは〈社会〉であった。本節では、ケトレーの体系である社会物理学（physique sociale）を概観し、彼の社会観を中心に分析する。

始めに、ケトレーの人となりについて簡単に押さえておこう[14]。1814年のウィーン会議で新設されたガン大学の学生だったケトレーは、在学中はガルニエ（J. G. Garnier, 1766－1840）らから数学や天文学の刺激を受けつつ、幾何学に関する論文を提出してこの大学初の博士号を受けた。卒業後、生涯に亘ってブリュッセル科学文芸王立アカデミーの理事、王立天文台長[15]、中央統計委員会委員長やイギリス等各国統計委員会のアドバイザーなどの重職を歴任し、まさに、「ベルギーのアカデミー・学士院を作り上げた、実質上の功績者」となった。1874年に77歳で亡くなった時には、各国・各方面の要人が彼の葬儀に参列したのであった[16]。

是非補足しておきたいのだが、ケトレーには、“芸術の人”・“教育の人”という顔もあった。若い頃は詩作や劇作に大いに才を発揮し、大学では最初「デッサン（dessin）」の講義を担当したり[17]、王立アカデミー再編時には、芸術部門設立のために尽力した。教育への情熱も負けず劣らず、博物館（Musée）での公開講義を無料で開いたり、「人民の（populaire）」と題される、天文学や確率論に関する小さな啓蒙書を著したりと[18]、積極的に“大衆向けの教育”に取り組んだ。彼の人柄もあって、講義は好評を博したと言う。

そんなケトレーが、統計学で〈社会〉を〈測定〉する契機となったのは、天文学を学ぶために留学していたパリで出会ったラプラス（P. S. Laplace）とその『天体力学概論（*Mécanique Céleste*）』である。７月革命の火種がくすぶるなか帰国したケトレーは、軍隊の要塞と化していた天文台に戻ることもできず、「気晴らし」からこの本を読み耽った。そして、天体力学と「社会力学（mécanique sociale）」、後の「社会物理学」の類推に考えを凝らした[19]。

ラプラスの他にも、フーリエ（J. B. J. Fourier）やポアソン（S. D. Poisson）ら当代の碩学たちの親炙に浴し、ケトレーは確率論を修めた。これが、ケトレーの理論構築を決定づけた。彼が企図した新しい科学は、観測・観察結果と誤差の問題を確率論によって解きほぐし、「大数の法則」や「正規分布」を測用いて測定結果を説明する、その対象に「人間」と「社会」を選ぼうというアイデアに基づくものだったのだ。

ここに及んで、遂にケトレーが「父」となる。元来、「国家における重要なる事象の全部を記述する」統計学には、ドイツ系の国勢学・国情論（Staatenkunde）とイギリス系の政治算術（political arithmetic）という二大潮流があった。ケトレーはここに確率論（calcus of probability）を持ち込み、３つの領域を統合することによって、近代統計学の緒を開いたのである[20]。

確率論の殊勲とは、「偶然を飼いならす」（ハッキング）ことを実現した点にある。“probability”の語源を探れば面白い。確率論研究者のゴドフロワ－ジュナンによれば、キケロがアリストテレスの『トピカ』を翻訳した際、日本語で「通念」と訳される「エンドクサ（$\varepsilon\nu\delta o\xi\alpha$）」を、ラテン語の「プロバービリス（probābilis）」、「ウェーリーシミリス（vērīsimilis）」と訳した[21]。この“殆ど本物らしい”（＝真実 vērus ＋似ている similis）という概念は、「蓋然性（probability）」として認識論などのテーマとなった[22]。

17世紀になって、この“確実らしさ”を御する方法論＝確率論が現われた。それまで偶然（chance）や運（hasard）が支配していると考えられてきたサイコロにも、際限なく振り続けることで出る目の比率が均され、ほぼ一定数に近づくという原則が見出されたのだ（大数の法則）。理論上、測定値とは常に「近似値（approximation）」であり、故に、どれほど精密に測ろうとも、測定には常に、理論的な“真の値”と測定値の間の「誤差（error）」が存在する。天文観測におけるこの誤差の問題は、ガウス（J. C. F. Gauß）やラプラスらが確率論による“飼いならし”を試みており、ケトレーも大きな刺激を受けていた。

「吾々の知識と判断とは、一般に、多かれ少なかれ大きさの確率にのみ基礎を

置くものであって、この確率を評価することを吾々は知らなければならない」[23]。今日の「科学」のあり方を予言しているようなこの言葉を言明し、ケトレーは、確率論に則ることで“集団を集団として測る”ことのできるようになったこの「近代統計学」を用い、〈社会〉を測ることにしたのである。それにつけても、ケトレーにとって、〈社会〉の測定とは一体何だったのか。

ここで改めて押さえるべき重要な点は、ケトレーは「天文学者」だ、ということである。「既に科学が天体に関して行い得たところを、どうして人間に関して試み得ないことがあろうか」[24]と問いかけるケトレーは、自身の社会物理学を次のように解説している。

> 〔社会に関して―引用者注〕吾々は天体を支配する諸法則と同様に固定し同様に不動的な諸法則を見出します。吾々は物理学の諸現象――そこでは人間の自由意志は全然消えて創造者の働きのみが害されないで優勢の地位に置かれる――へ帰るでありましょう。時間の外に又人間のきまぐれの外に立つそれらの法則の全体は一つの別個の科学を形成します。それに私は社会物理学なる名称を与えることができると考えました[25]。

つまり、天体が、観測値の誤差（確率論的に処理できる！）に関わらず客観的法則に従うのと同様に、社会という“人間集団”もまた、測定を攪乱する個々人の「自由意志」（確率論的に処理できる！）に関わらず何らかの自然法則に従う、という主張である。

所謂物理学・力学に限らず、人相学のラーファーター（J. K. Lavater）やメスメリズムのメスマー（F. A. Mesmer）、自身の構想を「社会物理学（physique sociale）」と宣言していたコント（A. Comte）、そして上述ラプラスなど、18世紀以降の西洋の科学的探究とそれに携わる人間は、多くがニュートン・パラダイムの埒内にあったが[26]、ケトレーとても例外ではない。“科学の文法”に準じて、と断じてよいのかは措くとしても、ケトレーの統計的研究、とりもなおさず〈社会〉測定の主題・眼目は、次の二点に整理される。

(1)　人間法則（loi）の発見と定立
(2)　原因（cause）把握とその応用による現状改善

統計学史において、「社会科学における不確実性の測定（measurement）を、実

用的なものとして実現される最初の一歩を踏み出した」[27]と評価されるケトレーの社会物理学について検討するならば、彼の主著『人間に就いて（*Sur l'homme*）』（1835）を繙くのが最良の方法である。科学史家のサートンが「19世紀で最も偉大な著作の一つ」[28]に数え、自身「統計学に関する私の全ての仕事の要約である」[29]と述べて、二度に亘り増補改訂版を出版したこの文献は、ケトレーの生涯一貫した理論を窺い知ることのできる好個の史料である。

ケトレーの著作は広く読まれ、少なからずの反響を呼んだと言われており、ケトレーの「特別の弟子」であったヴィクトリア女王の夫アルバート公は言うに及ばず、ナイチンゲール[30]やダーウィン[31]などもケトレーを読み、刺激を受け、自身の学説を打ち立てる際にも大いに影響を受けたという。そんなケトレーの主著と評されるのが『人間に就いて』なのである。同時代の統計学者であるクナップ（G. F. Knapp）も、この研究が“統計学の念願であった精密科学化を実現”し、“人間（「社会の動く原子」）の法則を発見したことによってもたらしたインパクト”の大きさを証言している[32]。

副題に明らかだが、これは「社会物理学論」の研究書である（尚、ここで指摘しておくべきは、単数形で書かれた「人間（l'homme）」は、実は集合体としての人間、〈人間集団〉を意図しているということだ）。原典、邦訳版とも、１、２巻を合わせて600頁を超える大部であり、ここに展開されたケトレーの学説は広範で興味深い。構成は「緒論」に続いて４編あり、順に①出生や死亡などの人口統計、②身長・体重・筋力などの統計、③知性や道徳性に関する統計、④平均人（l'homme moyen）理論[33]とその社会への応用、である。

ケトレーは序文の中で、この４部構成の内訳について「初めの３編には事実しか述べられていない。第四編には、平均人の理論と社会制度の組織とについての、私の思想が記されている。この部分は、初めの部分からは全く独立している」[34]と述べ、前３編では「平均人一般の量定」を行うとした[35]。つまり、数値化された「事実」を統計的に観察し、大数をその統計量＝平均値において分析し、体格や道徳性における平均人を量定しておくことで、第四編での社会物理学的考察を準備する、と言うのである。上記二点の研究主題に関連して言えば、前３編が主に⑴について、第四編が⑵について論じている。

但し、ケトレーの断りにも関わらず、「平均人」思想が彼の理論の独創的な骨子である以上[36]、平均人の量定と社会物理学が分かたずに読まれることこそ、無論適当なのであり、また理解もしやすいように思われる。喩えるなら、“天体観測”も天文学の重要な一部であり、不可分であるということだ。『人間に就いて』に

おいて、ケトレーの試みた統計学的観察も含めて、一体としての「社会物理学」を考察するのがよいことは論を俟たない。

それにつけて、この書の読み方について、もう一つだけ補足しておこう。緒論でケトレーが、「人々が本書の構成を支配する思想のみを判断し、細部の書き方に対しては余り厳格でなからんことを望む」[37]と願ったように、この書で示されたケトレーの統計研究の材料や手続きには、実際多くの問題があり、課題が数多く指摘されてきた。『人間に就いて』で見せたケトレーの考察に対する、最も端的でかつ最も的を射た批評は、高野岩三郎（1905）の「大膽ナルヲ思フトキハ吾人ハ甚タ氏ノ勇氣ニ驚カサルヲ得サルモノアリ」[38]だろう。つまり、資料が僅少なのにも関わらず、その統計的観察から「大胆」にも“人間の自然法則の存在”という結論を、「勇気」を以て表明したことに驚きを禁じ得ないと言うのだ。確かに、ケトレー自身も、研究に使用した材料が「あまりに欠陥だらけ」だった事実を認めている[39]。これは、彼の基本的な戦略である確率論や大数の法則、比較の手法などにとって致命的な問題なのだが、しかし同時に、政府による統計資料さえ整備されれば論理・思想・方法等に間違いはない、というケトレーの確信に満ちた宣言でもあるのだ。

もとより、全てを具（つぶさ）に検討することは叶うはずもない。本稿では、人間集団＝〈社会〉の法則に関するケトレーの言葉・考えを抽出し、彼にとっての〈社会〉測定を考察する。「平均人」や「犯罪傾向（penchant au crime）」、「道徳統計」や「原因」の概念など、ケトレーが発表した興味深い議論については、稿を改めて論じたい。

ケトレーの研究目的は、「自然的にせよ攪乱的にせよ人間の発達に作用する諸原因をその結果について研究し、それらの原因の影響と諸原因が相互に変化し合う仕方とを測定する（mesurer）こと」である[40]。「その結果」とは数値化された統計のことであり、その方法は、巻頭にラプラスの口を使って表明されている「自然科学で大いに役立った方法である、観察と計算とに基礎を置く方法」である[41]。この方法が、確率論に基づく以上、必然的に対象となる人間は“集団”としての人間である。

ここで重要なことは次の点だ。大数の法則によって導き出された「法則」は、個としての一人一人の人間に適用されてこれを説明することはできない、ということである。クナップは、統計学を「測定科学（Messungsdisciplinen）」と呼んだが[42]、“集団を測る”科学であり、“集団の法則”としての「人類に関する法則」

を扱う学問であるケトレーの社会物理学も、測定の科学である。だが、そもそも“集団を測る”とは何なのか。

> 何よりも先づ吾々は、個々の人間を離れ、個々の人間（individualité）は単にこれを人類全体の一部分（une fraction de l'espèce）としてのみ考察せねばならない[43]。

これは「緒論」の一節である。これと類似の、警鐘にも似た言明が、600頁のうちに何度か繰り返される。更に続きを引用しよう。

> 各個人からその個性をとり去ると、偶然的に（accidentel）過ぎない総てのものが除去されるであろう。かくて、大量の上に殆んど又は全く影響のない個人的特質（particularités individuelles）は自ら消失し、一般的結果（résultats généraux）を捕捉することが出来るであろう[44]。

これが大数の法則の応用や天体力学の類推であるという指摘は繰り返さない。“教育の人”ケトレーは、この理論を、“一つの円”と“それを構成する一つ一つの点”、或いは“一本の虹”と“それを構成する一粒一粒の水滴”という比喩で説明している[45]。

個別的な観察では「単に無数の個人的特性のみが目に映る」だけで、「個人を支配する非常に面白い法則」に思い至ることすらない、というのがケトレーの主張である。確かに、肉体的性質に関することや、飲酒癖などの性向を対象とする場合は、統計観察は個々人から始められなければならない。「われわれの研究を始めなければならないのは個人として考察された人間からである」という次第だが[46]、「われわれの研究」とは、〈社会〉を主題とした事象の解析作業である。

当然、「個人として考察された人間から」研究が始まると言っても、それはあくまで、社会物理学の“データ”に過ぎず、平均人量定のための材料に過ぎない。社会物理学を構築するためには、「特殊の場合や非正常的事項に関わったり、又は或る個人が何かの能力に関して多少卓越した発達をなし得るかどうかを、尋ねたりするべきではない」[47]。個別的考察は大数として統計され、「原因」の観点から処理・分析され、最後に集団としての人間の法則が析出される。そうなると、「最早個人的なものは何も持たない」[48]集団の法則となるのである。

実は、ケトレーが『人間に就いて』の中で「社会」を明確に定義する箇所は見あたらない。だが、一人一人の人間が存在し、彼らが集まって「国民」（ないし「国

家」）や「犯罪者」などの属性的集団を構成し、それらが集まってシステムや制度を有した〈社会〉という人間集団を組織する、という集合関係を全体の論調から推し量るのは、難しいことではない。“様々な人間カテゴリーを包含した、独自のシステムや制度を有する人間の集団”を、ケトレーの〈社会〉と見てまず間違いないだろう。

〈社会〉の法則は、統計観察――つまり統計集団の測定観察――によって導き出され、平均人の法則として定立する。集団から出た集団の法則は、個人を説明できない。ケトレーは『確率書簡』の中で、このことを死亡表を例に説明している。死亡表に見られる各種の確率は、個々人には適用されない。何故かというと、「個々人に関する総ての特殊性を考慮にいれることはできない」ためであり、「それは恰も、或る特定の人が何歳で死亡するかを、死亡表の中に探そうとするに等しい」所業であるからだ[49]。確率の数は一般的にしか真とは言えず、「これを個々的にかくかくの個人に適用すると誤りに陥る」のだ[50]。

本文の別の箇所で、ケトレーは「過去の結果によって将来現れるべきものを測定することができる」と言っている[51]。だが、それはあくまで集団的な人間の中の割合や確率であって、何ら個人を特定するものではないのである。因みに、このアイデアは物理学者のマクスウェル（J. C. Maxwell）に“天啓”を与えた。気体を構成する一つ一つの分子の動きは把握できないが、統計的に観察によって分子の平均的振る舞いを算出し、気体の温度や圧力を予測する、気体分子運動論を思いついたのである[52]。〈社会〉の法則に従う人間を「原子」や「分子」に喩えることがあるが、どちらかと言えば“人間社会の中で一見無秩序に動き回る個人のような分子”という喩えこそ、学問史に即して相応しい比喩であるという事実は愉快である。

ケトレーに先んじて「社会物理学」を標榜したコントは、よく「社会学の父」と称される。社会物理学に替えて、初めて“sociologie（社会学）”の語を用いたことと、所謂「実証主義」の創始によってである。実証とは“positif”の訳語であり、「現実性」「有効性」「確実性」「建設性」「相対性」を意味する[53]。具体的にどのような手段によって担保されるのかと言えば、案の定、例えば「観察」や「実験」である[54]。上述の通りニュートニアンであったコントは、「全ての現象は、様々な自然法則に従う」と考えており、この諸法則を複数見出して、できうる限り余計なものを廃棄・統一していくことが、彼の目的であった[55]。

ところが、コントの意図したそのような「実証的」な社会の科学は、むしろ、

人間集団としての〈社会〉を、数値化された対象の統計的研究で分析し、そこに法則を発見しようとしたケトレーの社会物理学でこそ成就し得たのではないか。その意味では、〈社会〉を測定したケトレーの「新しい科学」こそが、“真の社会学”ではなかっただろうか。サートンもこの点を支持し、「コントは尊大な城を砂上に建てた。ケトレーはより謙虚な建造物を岩盤の上に築いたのだ」と表現している[56]。ここに、「社会学の父」としてのケトレーが姿を現す、というのが本節の主張である。

第三節　ブースの〈測る〉社会学

チャールズ・ブース（Charles Booth 1840-1916）は「科学的[57]貧困調査の創始者」として知られている。ブースは学者や研究者の類ではなかったが、フェビアン協会（Fabian Society）に深く関わるなど社会改良主義者として活動を広げ、貧困問題に関する政府の委員会でも発言力をもった人物である。ブースは19世紀から20世紀の世紀転換期にロンドンで社会調査を行っている。その「ロンドン調査」（1886－1902年）の結果をまとめたレポート『ロンドン民衆の生活と労働（*Life and Labour of the People in London*）』は17巻にも及び、現在に至るまで貧困研究の金字塔として扱われてきた。その「社会調査」は以下のような三つのテーマに沿ってなされた。

1．「貧困調査」（1886－91年）
2．「産業調査」（1891－97年）
3．「宗教的影響力調査」（1897－1902年）

上記の成果に基づいて『ロンドン民衆の生活と労働』（以下『生活』と略記）が三期に分けて出版された。本節ではこのうち、第一期の「貧困調査」（最初の四巻）について主に扱う。まずは、ブースが社会調査の全体的な目的を述べている部分を引いておこう。

> 私の目的は貧困、悲惨そして堕落が規則的な所得と相対的な安楽とに対してもっている数量的関係を明らかにするとともに、各々の階級がその下で生活している一般的な状態を叙述しようとすることであった[58]。

ここで述べられているように、ブースが目指したのは、「数量的関係」の把握であった。つまり本稿の文脈に即していえば、〈測定〉することである。レイモンド・ウィリアムス（Raymond Williams）は、ブースの仕事を「ブースが目指した非人格性――現地に行く前に地図を作成したり地域を等級分けしたりし、系統だった表を作成したりすること――のために、彼の本はメイヒュー（H. Meyhew）のように面白く読めないし、魅力も薄い」と断じている。しかし同時に、ウィリアムスはブースの方法の中に「新しい社会そのものが生みだしつつある新しいものの見かた」を見出している。それはすなわち、ラウントリー（B. S. Rowntree）やウェッブ夫妻（Beatrice and Sidney Webb）らによって発展させられることになる「社会学的想像力の経験主義的変型」である。ウィリアムスはブースの方法の問題点[59]を指摘しつつも、「だが良いところもある」と述べる。

> これは行きあたりばったりの慈善の代りに社会福祉事業を行うのに類する方法なのである。そしてここでは福祉事業自体（これは当時でもいまでも同じことで調査の精神をもってなされる。だが調査の精神をもってなされるからといって福祉事業であることに変りはないし、それに拡充もされたのである）が、都市のさまざまな問題に対処するための、これまでになかったような方法なのである。さらに、統計的な方法自体、ディケンズをはじめとするヴィクトリア朝初期の人道主義には破壊的で嫌悪すべきものに思われたとしても、これほどの規模と複雑さをもった文明に対処するしかたとしては当然のものといえるのである[60]。

さて、ブースの社会調査において最も有名な成果は、「貧困線（poverty line）」の発見であろう。ブースは一週間の収入が21シリングと22シリングの階層間に「貧困線」を引き、貧困線以上の「普通の」生活および安楽な生活を営むことのできる世帯と、それができない世帯とに人口を分割した。そして各々の階層を四つに分類し、最終的には前述のように人口をA～Hの八つの階級に区分したのである。その結果明らかになったことは、ロンドンの総人口（430万人）に対して、貧困層が30.7%存在するという事実であった。ブースは自らの予測（貧困層はもっと少ないだろうと考えていた）を裏切る結果に驚いている。以下に、ブースによる階級分類の内訳表を示す。

A．臨時日雇い労働者、浮浪者、準犯罪者などの最下層階級	0.9%
B．不定期所得者――「極貧者」	7.5%

C．非定期的所得者：
D．定期的小額所得者：C と D あわせて「貧困者」　（C＋D）22.3%
……貧困線（週給21シリングと22シリングの壁）……
E．定期的標準所得者――貧困線以上
F．上層労働者　（E＋F）51.5%
G．下層中産階級
H．上層中産階級　（G＋H）17.8%

［Booth: Ⅰ, p.33, p.21をもとに作成］

「貧困線の発見」、そういった調査結果自体も確かに重要である。しかし、より重要なことは、ブースの調査があくまでも「貧困調査」と銘打たれ、実際に「貧困」という抽象的な次元にまで踏み込んでしまったことではないか。ここで「実際に」という表現を使ったのには理由がある。安保則夫が指摘するように、19世紀のヴィクトリア期を通じて社会問題や調査対象として見なされたのは、「貧困」ではなく「被救済貧民（Pauperism）」であった[61]。1834年の新救貧法（Poor Law）がそのことを象徴している。「困窮（destitution）、すなわち労働しえないか、あるいはその労働の報酬によって生活手段を獲得するために労働せざるをえない者の状態」と、「貧困、すなわち単に生活資料を獲得するために労働せざるをえない者の状態」とを峻別することが、救貧法委員会の根本的な認識であった。そしてこの認識のもとに、委員会は、後者すなわち「貧困」に対する救済はこれを拒否し、前者すなわち「困窮」に対する救済は「健全で明確な原則」にもとづいてこれを実施しうることを勧告したのである。こうした救貧政策下では、個々人の「自立の失敗」は、もっぱらその当人のみに責任があると考えられていた。従って救済の判断についても厳密な規定があり、それをクリアしたとしても救貧院（workhouse）での悲惨な生活が待ち受けていた。つまり新救貧法は、生活困窮者＝救済申請者を「被救済貧民」のカテゴリーに押し込め、差別的な処遇を与えようとしたのである。

ブースは、従来の都市観察者の考察は「困窮者」や「貧困者」が具体的にどのような階層なのかを明示せずに議論をすすめることから、粗雑に過ぎると考えていた。そのためブースは人々を正しく「階級」に従ってカテゴライズすることにこだわる。ブースは都市の「貧困」という問題意識のもと、いったん人々の群れを解体し、分類し、再構成する。ブースにとって「階級」は例えばエンゲルス[62]

が考えたような能動的な集団ではない。それは〈測定〉の対象でしかない。従って都市問題、雇用の問題など経済構造の矛盾について、ブースは次のようにシニカルな裁定を下すのだ。

> 近代産業システムはある程度の失業者層――労働予備軍――なしには作動しない。しかし今日のロンドンではこの層がすべての分野で大げさになっており、ことに最下層労働階級においては膨大になっている。この状態を自らの利益に則したものと考える雇用者たちもいる[63]。

しかしブースは、こうした階級関係・経済構造の問題を根本的に変革しようという提言をすることはない。そのためブースは最終的に「貧困」の解決を放棄してしまう。それはある意味で当然の帰結であった。ブースは「階級間格差」に注目してはいたが、「貧困線」という概念を導入することで、貧困を「労働者階級の問題」として限定してしまった。階級「間」ではなく「労働者」階級だけを問題と見ていたブースは、階級編成それ自体を生み出す構造を把握することはできなかったのだ。つまりブースの分析枠組みでは現実の労資関係について有効な提言はできず、構造的な「貧困」に対しては手も足も出なかったのである。では、ブースは何をもって貧困問題の解決に代えようとしたのか。それに暫定的な解答を出す前に、ブースの活躍した時代背景について確認しておきたい。

チャールズ・ブースが調査を開始した1886年とは、いったいいかなる時代であったのか。1880年代はイギリス史における激動の10年であった。工業化による莫大な蓄財の一方には、各種の労働組合の形成や英国労働党の設立があった。1880年にトランスヴァールでダイヤモンドが発見されて、アフリカにおける帝国主義的冒険が行なわれるのと時を同じくして、イングランドにおける都市の貧困と住宅不足が劇的な注目を浴びた。帝国の夢は、アナーキストやアイルランドの民族主義者による政治的テロリズムによって足元を揺さぶられた。帝国主義の頂点とまさに同時に、退化と没落の不安が存在したのだ。大英帝国[64]は退廃期のギリシアやローマによく較べられ、囚われた民族の蜂起に対する不安もあった。

とりわけ人種の境界線こそがイギリス社会にとって最も重要な線引きのひとつであったために、植民地の反乱だけでなく、人種の混合、混血化、相互結婚に対する不安にあおられて、科学的、政治的に黒人と白人、東洋と西洋の明確な区別線を引こうとする動きが出た。1885年、カートゥームにおいて、イスラム原理主義のマフディー派によって英雄ゴードン将軍が殺害されたあと、帝国が人種の退

化と「下等な」人種の反乱によって切り崩されてゆく徴候を、多くの人々がそこに見てとった。ヴィクトリア時代後期の科学、とりわけ新しい形質人類学などは、人種を分類してヒエラルキーをつけることの正当性をやっきになって明確にし、「こうした境界線が侵犯されたときに起こりかねない諸々の退化現象」[65]を論証しようとした。

階級関係も大きな危機に見舞われた。1870年代の末、イギリスと西ヨーロッパ全体が経済的な不況に襲われ、80年代になると初めて「不況（depression）」という語が使われるようになった。都市の中心部に残ったのは、恒常的な貧困と厳しい失業に直面した「最下層民」であった。こうした下層民はスラム街に住み、病気、無知、狂気、犯罪の温床となったが、優生主義者のなかには、これらの問題は手におえないので、貧民には子どもを作らせるべきではないと思う者もいた。都市の退化説はさらに、貧困は人種全体の退化につながるとまで主張した。社会主義者のH・M・ハインドマン（H. M. Hyndman）は「都市労働者の実状（English Workers as They Are）」（1887）の中で、「手を差しのべようにもそれすらできない人々が、いたるところに何パーセントかいることは疑い得ない。肉体的にも精神的にも社会の環境に押しつぶされて溝に落ちてゆく彼らは、ただ死んでゆくのみであり、望めるのは、よりよき時代の重荷となるような子孫を残してくれるなということである」[66]と書いている。

19世紀の大半を通じて、都市における階級間の境界線ははっきりと引かれていて、貧しい人々はイースト・エンドの労働者地区に限定され、住宅と職の有無が階級間の境界線をくっきりと目立つものにしていた。1887年のロンドンでは、住むところのない人々がトラファルガー広場とセント・ジェイムズ公園で野宿を始めてしまい、同情と不安をかきたてた。ここでチャールズ・ブースの説明を借りると、「この事態が衆目を集めることになった。各新聞がその説明をのせ、人々の想像力がかきたてられた。ともかくここにある苦しみは本物だった。慈善組織のなかには食券や宿泊券をくばる者があったし、車で食べ物を広場に運んで、直接にくばる者もあった」[67]。その一方で、宿無しや窮乏者が流入して客足が遠のくのをおそれる商店主もたくさんいた。彼らは警察にその事態の収拾を要求し、それができないなら、自前で警備をやとって通りをきれいにするとおどした[68]。この圧力をうけて、警察が広場や公園の一掃に手をつけた結果が1887年11月の「血の日曜日（Bloody Sunday）」における流血の衝突である。要するに最暗黒のイングランドのこのような下層世界は、階級革命の脅威をたえず突きつけていたのであり、いつなんどき労働者が蜂起するかもしれないとされていたのである。

チャールズ・ブースは1886年に『ロンドンの人々の生活と労働』17巻を執筆するために、悪名高いイースト・エンドで調査を始めた。ブースはこの地区を含む東ロンドンに住む「最下層階級」の人口を１万１千人、人口の1.25パーセントであると見積った。この博愛主義者の記述はブルジョワ階級の不安を駆り立てるより、警戒心を取り除くのが目的であった。

> 野蛮人の群れがいつかスラム街を出て社会を圧倒するだろうと、そんなふうなことをわれわれは聞かされていたが、こうした野蛮人の群れはいない。『野蛮人』はいるにはいるが、それはほんの一握りで、すでにその数が減少しつつある小集団にすぎない。恥ではあるが危険ではない[69]。

ここでブースの階級区分の話に戻るとしよう。「階級 B、ここに社会問題の要点が存在する」[70]とブースはいう。ブースによれば、貧困者（階級 C と D）の貧困は主として極貧者（階級 B）との競争の結果である。「この極貧者階級を日々の生存競争から完全に排除すること、それが問題の唯一の解決になるだろう」[71]。ブースにとって「真の労働者階級」とは、階級 E と F の集団を指すが、「階級 D の低賃金労働、階級 C の不規則雇用、そしてこれらの階級が貧困で不規則雇用であるために共済も団結もなしえないということが、階級 E に重くのしかかっている」[72]。そしてブースは階級 B を「余計な者（the unrest）」と断定する。B の競争が C と D の足を引っ張り、C と D の競争が E にのしかかる……という構図がここで描かれている。その判断の当否はさしあたって問題ではない。重要なことは、ブースがここに至って排除すべき「敵」を発見したことである。階級 B は産業的に何も貢献するところがない。従って「この泥沼を干拓することが我々の主要な任務でなくてはならない」[73]のである。

つまりブースの社会調査によって「発見」されたのは結局のところ「被救済層」としての貧困層であり、「敵」としての「階級 B」であることになる。フーコーのターミノロジーに乗っかるならば、ブースが発見したのは、具体的な救済対象としての個人ではなく、「全体」としての階級、「人口」であった。ブースの調査において、被救済者はもはや具体的な生命としての「者」ではなく、人－物（階級）込みで数値化される「モノ」＝「人口」なのである。そして、そうした人口は不可避的に国民化のプロセスに組み込まれてゆくだろう。それはウェッブ夫妻が『産業民主制論（*Industrial Democracy*）』（1897年）の中で用いた「ナショナル・ミニマム（national minimum）」（国民最低限の生活保障）という理念からも推し

量ることができる。当初その概念は、労働組合が経営者に対して最低限の保障を要求する提言であったが、ウェッブ夫妻以降、労働条件の改善にとどまらず、社会立法を通じて広く「国民」生活全般にわたる福祉を保障する政策要求にまで発展していったのである。

> 人間としての生活の最低レベルを永続的に上昇させるためには、多くの努力が一点に集約されなければならない。非常にゆっくりとした流れの中でのみ成功は達成されるが、おそらく完全に達成されることはないだろう。しかし行為の原則は不変で同一のものである。つまり、生活が一般に認められた最低限以下に落ちる場面では、行政行為および罰則によって干渉し、また一方で改善のためのあらゆる機会を提供すべきである[74]。

ブースのこうした判断は、政策的には新救貧法の維持という結果しか生まなかったが、〈社会〉思想的には後世に大きな影響を与えている。ここで注目すべきは「最低限」という表現である。その理念は、前述のようにウェッブ夫妻によって「国民最低限」の生活保障と読み換えられ、〈社会〉政策として展開された。その理念はさらに継承されて、ベヴァリッジ（W. H. Beveridge）による〈社会〉保障計画の構想の土台となったのである。つまりブースの社会調査によって示された見解は、イギリスにおける〈社会〉に関する学の一つの礎となったのである。安保則夫は、ブースの社会調査の「意義」として次のような指摘を行っている。「それは、さまざまな階層からなる雑多な相対的過剰人口を内包する労働者諸階級を、いかにして社会的に再配置＝再編成するかという、十九世紀末の、独占資本主義段階にあるイギリスの戦略課題として提起されたのである」[75]。

つまりブースの社会調査による労働者階級の再編は、イギリスという「国家の」戦略として機能したと考えられるのではないか。人口という名付けを経た人々は、従属化することではじめて主体となり、「国民」としての平等を享受しうる。従って、そこからはみ出す人々に対してはタフに対応せねばならない。まさしく政府は、自らの統治にとって望ましくない存在、「危険な個人」から「社会を防衛せねばならない」のである。ブースはレポートの最終巻の結論部（上記に引用した箇所）において、貧困者に対して国家が積極的に干渉していく可能性を示唆しているが、これを国家による締め付けとのみ理解すべきではないだろう。「また一方で」そうした権力は「改善のためのあらゆる機会を提供」するのだ。これはつまり「生きさせる」権力である。こうした権力の手続きを、フーコーは「生

政治」と呼んでいる[76]。それは19世紀以降あらわれた、「生きさせるか死の中へ廃棄する権力」を調整する管理システムであり、「生命に対して積極的に働きかける権力、生命を経営・管理し、増大させ、増殖させ、生命に対して厳密な管理統制と全体的な調整とを及ぼそうと企てる権力」[77]を統制する政治学なのだ。ブースの「結論」と、フーコーによる人口の問題についての記述を並置してみると、ブースの中で規律権力と生政治のまなざしが交錯していることに気付かされるはずだ。

> この（国家的諸力の）テクノロジーが取り扱うべき主要な対象のうちに、人口の問題がある。人口は、重商主義者にとっては富国化の原理そのものであり、誰にとっても国力のもっとも重要な要素であった。そして、この人口を管理するためには、とりわけ幼児の死亡率を低下させ、疫病を予防し、風土病の発生率を低下させ、生活条件を改善し、（食事であれ、住居であれ、都市環境であれ）基準を定め、十分な医学的な施設を保証するために政治的介入をすることができるような厚生政策が必要であった。十八世紀後半から始まる、当時、〈医学警察〉、公衆衛生、〈社会医学〉などと呼ばれていたものは、〈生体政治〉bio-politique という一般的な枠のなかに再登録されなければならない[78]。

まるでフーコーはブースについてのサブ・テキストを書いたがごとくである。ここでもう一つ、前節において述べた「階級 B」の末路を思い出されたい。（生産にとって）「余計な者」とされる「階級 B」＝「この泥沼」を干拓せねばならない、という表現は、まさに生政治のシステムによってこの階級が、〈社会〉の内部に包摂されることなく、「死の中に廃棄」されることを意味しているのではないだろうか。このように、ブースにとって〈社会〉とは、人口を余計なもの／そうでないものに分割する、〈測定〉の手段として機能していたのである。

第四節　ケトレーとブースをつなぐ〈社会〉

第二節、第三節での検討を経て、ブースとケトレーの間をつなぐキーワードとして、〈社会〉という言葉の重要性が浮上してきた。直接的には時も場所も異にする二人の眼差しは、同様に人間集団＝〈人口〉を対象化した〈社会〉に向けられ、これに「科学的な」観察を加えることを行った。それは恰も、自然なものとしての〈人口〉を、時空を越えて鳥瞰するかのようであった。換言すれば、彼ら

は〈社会〉を〈測定〉する「社会科学者」だったのである。そうするとここで、「社会科学者」としてのケトレー、そしてブースに言及するにあたって、19世紀の「科学」概念について検討しておかねばなるまい。

村上陽一郎によれば、19世紀に出現した「科学者」という新しい知識層は、12世紀に大学が誕生して以来、「知識階層」として権威を持っていた神学者・医学者・法学者らとは、二つの点で異なっていたという[79]。第一に、伝統的な大学においては、基本的に哲学という「愛知」の世界を経て、その上で、神学・医学・法学を修めるという形態が取られており、これらの学者は、包括的な、しかも基本的にはキリスト教信仰の枠組みのなかにある世界観の具現者として存在していた[80]。最も典型的にはオックスフォードやケンブリッジでは、正規の教授のポストは永らく、聖職者のポストと連動しており、簡単に言ってしまえば、大学の教授であることはキリスト教（この場合は英国国教会的キリスト教）の聖職者であることだった[81]。第二に、聖職者・医師・法曹家という社会的職業は単に自分の知識や「わざ」を売ることで報酬を得るというようには考えられてこなかった。それらは言うなれば神から与えられた「天職」だったのである。英語でもこれらの職業は《vocation》と呼ばれることがあるが、言うまでもなくこの言葉の語源はラテン語の《vocāre》つまり「呼ぶ」ことである[82]。神によって「呼ばれた」結果、召命という形になって現れたのがこれらの職業なのだ。ではなぜ神は「呼ぶ」のか？これらの職業は、苦しんでいる人々に手を差し伸べることを目的としている。「患者」に当たる英語の《patient》は「苦しむ」ことを意味しており、そこから「苦しみに耐える人」という意味が生まれる。医師が「患者」に対するのはその人が「苦しんでいる」ためである。同じように法曹家は、社会において正義のために「苦しんでいる」人々に助けの手を差し出すのだ。そのことができる人、それなりの高い能力を持ち、篤い憐れみと愛の心を持ち合わせた人、それはもちろん一般の人々からは抜きんでたエリートなのだろうが、しかしその人並み外れた優れた才能や心は、それを他人のために働かせる目的で、神が特に選んでその人々に与えたものなのである。従って大学で学び、専門的な神学・医学・法学を学ぶ知的エリートは、世の中で苦しんでいる人々に救いの手を差し伸べるためにその才能を使うように、神によって特別に「呼ばれた」人々なのであった。その神の呼びかけ（召命，calling）に応えることによって、それらの職業ははじめて成立するものと考えられたのであった。だから、彼らに与えられる「報酬」、彼らが彼らの修得した知識と「わざ」とを使って行ったサービスに対して支払われる報酬は、ヨーロッパやアメリカではつねに《honorarium》と呼ばれてきた。

それは、支払われるお金が、彼らが自分の才能と心とを神に捧げていることに対する敬意の表現として理解され、認められていることの証である。支払われるお金が、決して売られた知識や「わざ」への対価ではなかったことの証拠である。

このように考えてくると、19世紀に出現した「科学者」という知的集団と、それまでにヨーロッパの大学が産出し続けてきた知的専門家層との間には、相当の違いがあり距離があると言ってよいことが分かる。「「科学者」はもはや神からの召命とは全く無縁のところで、そして幾許かは、国家・社会が必要としている人材という文脈のなかで、誕生してきた社会層」[83]であったのだ[84]。

このように科学が制度化[85]され、「科学者（scientist）」という言葉、そして“肩書き”が生まれた19世紀という時代は、新たな認識枠組みが誕生してきた世紀であった。

社会学者のマイケル・ドネリーも指摘することだが、ケトレーの「統計」という手法は「それ自体、社会についての言説」であり、「表象の新しい様式」であった[86]。これは、都市に関する「新しい表象」を作り上げたブースの社会調査にも当てはまる。二人が、「犯罪者」や「貧民」といった19世紀的な（或いは都市的な、と言い換えてもよいかもしれないが）「人間」をカテゴリー化、対象化することで、〈測定〉しようと試みたのだ。人々は、まさに「全体的」な視座の獲得のために「個別的」に切り取られて具体化・具象化された。そしてその結果がグラフや「地図」のかたちで視覚化され公表されたことによって、同時代の人々に、新しい認識枠組みとしての〈社会〉観が提供された／植え付けられたに違いないのである。

しかし、ある対象が〈社会〉として鋳抜かれる際には、必然的に外側にはみ出る「周縁的なもの」が生起するのではないか？ここで、古代中国の思想家である荘子の、「分けるということは、見えないところを作ることだ（辯也者有不見也）」という言葉を思い起こさずにはいられない[87]。それは対象の限定を伴わざるを得ない〈測定〉によって、〈社会〉を構成する重要な何かが捨象されてしまったことによる必然的な帰結なのだろうか。本稿だけではこの疑問に答えることはできない。〈測定〉のさらに多面的な展開については、稿を改めて論じる必要があろう。

【注】

1）ミシェル・フーコー『監獄の誕生―監視と処罰』（田村俶訳）新潮社、1977年、153頁

2）トマス・クーン「近代物理学における測定の機能」『科学革命における本質的緊張』（安孫子誠也・佐野正博訳）みすず書房、1998年、233頁

３）シュテーリヒ『西洋科学史』（菅井準一・長野敬・佐藤満彦訳）教養文庫、1975年、79頁

４）Pierre Camper, *Dissertation sur les variétés naturelles qui caractérisent la physionomie des hommes des divers climats et des différens ages*, trans. H. J. Jansen, Paris: Francart, 1792, « Figure »

５）A・G・ディーバス『ルネサンスの自然観』（伊東俊太郎・村上陽一郎・橋本眞理子訳）サイエンス社、1986年、25頁

６）西洋語彙“nature”に関する観念誌については、*Dictionary of the history of ideas: studies of selected pivotal ideas* の（Philip P. Wiener ed., vol.Ⅲ, New York: Charles Scribner's Sons, 1973）の George Boas, “Nature,”（「自然」（垂水雄二訳）『西洋思想大事典』２巻、平凡社、1997年）、ゲルノート・ベーメ「自然」（丸橋静香訳）クリストフ・ヴルフ編『歴史的人間学事典』勉誠出版、2008年などを参照。

７）プラトンは『法律』の中で、「万物の尺度は何にもまして神」と述べている。（『プラトン全集』13巻、森進一・池田美恵・加来彰俊訳、岩波書店、1976年、716C）

８）ガリレオ・ガリレイ『偽金鑑識官』（世界の名著21『ガリレオ』）（山田慶児・谷泰訳）中央公論出版、1973年、38頁

９）詳細な検討例としては、高橋憲一『ガリレオの迷宮』共立出版、2006年、415頁 ff. など。

10）村上陽一郎「科学と非科学」『技術・魔術・科学』新・岩波哲学講座８（大森荘蔵ほか編）、岩波書店、1986年、116頁

11）村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社、1976年、23頁

12）‘vanishing mediator’アメリカの比較文学者、フレドリック・ジェイムソンがマックス・ヴェーバーの方法論を論じる時に編み出したテクニカル・ターム。A と B の媒介として枠組みを作りながら、AB の接点が出来上がる瞬間に消滅するような媒体を指す。

13）十冊以上の事典から証拠立てている、高橋政明「ケトレーにおける比較可能の思想と統計論」『経済学論集』鹿児島大学法文学部紀要、第８号、1972年、168頁などを参照。

14）主に、Frank Hankins, “Biographical Sketch,” *Adolphe Quetelet As Statistician*, New York: Columbia University, 1908, pp.9-35（邦訳述：財部静治『ケトレーノ研究』京都法学会、1911年）を参考にした。

15）先行研究の間で記述が揺れる点だが、ティベルギアンによると、1828年４月９日に天文台付きの天文学者の辞令を受け、明くる1829年３月12日に天文台長に就任した、ということである。（Albert Tiberghien, “Adolphe Quetelet et l'Enseignement,” *Revue de l'Université de Bruxelles*, vol.31, 1926, p.410）

16）今日のベルギーにおけるケトレーの影響の大きさについては、高橋政明「現代ベルギーとケトレー」『経済学論集』鹿児島大学法文学部紀要、第17号、1980年などを参照。

17）Albert Tiberghien, *Op. cit*., p.407

18）1827年に書かれた「通俗天文学（*Traite populaire d'astronomie*）」などは、幾つかの言語に翻訳されて広く読まれ、天文学の基礎知識を市井に伝える役を果たしたと評価されている。

19）佐藤博「第２章　ケトレーにおける「統計学」と「社会物理学」の構想」『統計と統計理論の社会的形成』（長屋政勝・金子治平・上藤一郎編著）北海道大学図書刊行会、1999年、43-44頁
20）ウェスターゴード『統計学史』（森谷喜一郎訳）栗田書店、1943年（原1932）、1-3頁
21）Anne-Sophie Godfroy-Genin, "De la doctrine de la probabilité à la théorie des probabilités: Pascal, *la Logique de Port-Royal*, Jacques Bernoulli," Thèse de philosophie à l'Université Paris IV-Sorbonne, Paris, PhD thesis, p.113
尚、キケロと『トピカ』に関しては、平野敏彦「キケロ『トピカ』についての覚書」（植松秀雄編『埋もれていた術・レトリック』木鐸社、1998年）を参照。
22）例えば、ジョン・ロック『人間知性論（*An essay concerning human understanding*）』（1689）の第４巻など。
23）ケトレー「第一書簡」『確率理論に就ての書簡』（高野岩三郎訳）統計学古典選集第五巻、栗田書店、1942年（原1846）、29頁
24）A. Quetelet, *Sur l'homme et le développement de ses facultés, ou essai de physique sociale,* Paris: Bachelier, 1835, Tome 1, p.28（邦訳：『人間に就いて』（平貞藏・山村喬訳；高野岩三郎校閲）岩波文庫、1939年、上巻39頁）
25）ケトレー「第三十四書簡」前掲書、100頁
26）中山茂『歴史としての学問』中公叢書、1974年、114-127頁
27）Stephen M. Stigler, *The History of Statistics*, Cambridge: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1986, p.161
28）George Sarton, *Sarton on the History of Science*, selected and edited by Drothy Stimson, Cambridge: Harvard University Press, 1962, p.229
29）A. Quetelet, *Op. cit*., Tome 1, p.i（上巻７頁）
30）丸山健夫『ナイチンゲールは統計学者だった―統計の人物と歴史の物語』日科技連、2008年、第１章
31）丹治愛『神を殺した男―ダーウィン革命と世紀末』、講談社選書メチエ、1994年、154頁
32）クナップ『道徳統計に関する近時の見解』（権田保之助訳）統計学古典選集第５巻、栗田書店、1942年（原1871）、321頁
33）『人間に就いて』で披瀝されるケトレーの核心的なアイデア。「単なる、或る国民型」といったものではなく、人間の諸側面を測定する本文①②③の統計の平均値の集合として現れる「仮想的な存在（être fictif）」であり、大量のデータの観察によって生まれる"社会の「重心」"が「平均人」である。平均人は、統計観察によって措定された社会法則が、最も適合し、同時に平均人について定められた法則が、「社会の出来事を最もよく説明する法則」となるような概念上の存在である。更にケトレーは、各時代においてこの平均人を量定できるならば、「その時代の人類発達の型」が見出されるとしている。換言すれば、人類が全く進歩しないのであれば、平均人は、理論的に、時空を超えた人間の「典型」ということになるのである。
34）A. Quetelet, *Op. cit*., Tome 1, p.i（上巻７頁）

35）*Ibid*., p.29（上巻41頁）
36）「平均人」という言葉自体は、ケトレー以前にも用例が見られるが、正規分布の中点であり、典型の意味にもなるケトレーの平均人思想は、彼のオリジナルであると言う（佐藤博、前掲論文、38頁）。平均人については、注33を参照。
37）A. Quetelet, *Op. cit*., Tome 1, p.26（上巻37頁）
38）高野岩三郎「あどるふ、けとれート犯罪統計論」『法学協会雑誌』第23巻第12号、1905年、1707頁
39）A. Quetelet, *Op. cit*., Tome 2, p.225（下巻294頁）
40）A. Quetelet, *Op. cit*., Tome 1, p.21（上巻33頁）
41）ラプラスの『確率の哲学的試論（*Essay ph. sur les probabilités*）』（1812）からの引用。因みに、ケトレーが1853年に著わした『確率論（*Théorie des Probabilités*）』の扉には、ラプラスの肖像画が印刷されている。
42）V・ヨーン『統計学史―統計学の起源からケトレーまで』（足利末男訳）有斐閣、1956年（原1884）、13頁
43）A. Quetelet, *Op. cit*., Tome 1, p.4（上巻21頁）
44）*Ibid*., p.5（21頁）
45）*Ibid*., p.6（22頁）
「平面の上に描かれた非常に大きな円周の一部分を余りに近くから凝視する者は、･･･出鱈目に集められた多くの点を見る」だけである。然るに、「もっと離れた所に身を置けば」、やがて「個々の点は限界より消失し、それらの諸点の間に偶然に存する変な配列も見えなくなる」。“大量の点”が、今や“一つの円”となり、「諸点の一般的配列を支配する法則」が明らかとなる。個々人を焦点化してばかりいると、「美しい虹」に気づかないどころか、そのような総体的現象のアイデアさえ思い浮かばない、という趣旨である。
46）A. Quetelet, *Du systéme social*, p.iv
47）A. Quetelet, *Sur l'homme*, Tome 1, p. 21（上巻34頁）
48）*Ibid*., p.14（28頁）
49）ケトレー「第四十四書簡」前掲書、196頁
50）同上、「第六書簡」、69頁
51）A. Quetelet, *Op. cit*., Tome 2, p.168（下巻154頁）
52）トム・ジーグフリード『もっとも美しい数学―ゲーム理論』（冨永星訳）文芸春秋社、2008年（原2006）、203-226頁
53）本田喜代治・出隆・大橋精夫「用語解説」『実証の思想』世界の思想第10巻、河出書房新社、1966年、390頁
54）Auguste Comte, *The positive philosophy*, trans. Harriet Marrtineau, vol.1, London: George Bell & Sons, 1896, p.8
55）*Ibid*., p.5
56）George Sarton, *Op. cit*., p.237

57）ここで「科学的」というのは、ブースの調査を、社会生活を「量的に」把握する研究だと評価することを意味している。
58）Booth, Charles（1902-3/1970）*Life and Labour of the people in London*, 17vols : AMS Press, p.6（以下、論文中の引用・参照時には、巻数に応じてⅠ～ⅩⅦと略記している）
59）貧困者を単なる「研究対象」にしてしまっていること、社会の性格についての総合的な概念が欠如していること、など。
60）レイモンド・ウィリアムズ『田舎と都会』（山本和平訳）晶文社、1985年、296頁
61）安保則夫『イギリス労働者の貧困と救済　救貧法と工場法』、明石書店、2004年、307-8頁。
62）エンゲルスが「階級」にこだわった大きな理由は、「階級意識」がプロレタリアートの団結につながる、と考えたからであった。
63）Booth : Ⅰ p.152
64）ただしこの文脈では、大英帝国の版図すべてを指すわけではなく、概略、イングランドのことを示している。そして特にロンドンにおいてこの種の言説は顕著にあらわれた。次の文献などを参照 Booth, William（1890 / 2006）*In Darkest England and the Way Out:* Meadow Books
65）Stepan, Nancy（1985）'Biographical Degeneration; Races and Proper Places', in Sander L. Gilman and J. Edward Chamberlin eds. *Degeneration; The Dark Side of Progress:* Columbia University Press: 98
66）Hyndman, H. M.（July 1887）'English Workers as They Are', *Contemporary Review* 52, p.129。
67）Booth, Charles: Ⅰ, p.213
68）Stedman Jones, Gareth（1971 / 1984）*Outcast London: A Study in the Relationship between Classes in Victorian Society*: Penguin, p.296
69）Booth: Ⅰ, p.38
70）Booth: p.176
71）Booth: p.154
72）Booth: p.162
73）Booth: p.176
74）Booth: ⅩⅦ p.208
75）安保、340頁。強調は引用者による。
76）治安・公衆衛生・救貧・教育などを通じて、全社会的規模で「規律」を貫徹させるものとしての「ポリス」という概念を取り上げ、18世紀以降の近代西洋社会における〈生－権力〉の展開を描き出した研究に、白水浩信『ポリスとしての教育―教育的統治のアルケオロジー』東京大学出版会、2004年がある。
77）ミシェル・フーコー『知への意志』（渡辺守章訳）、新潮社、1986年、173頁
78）ミシェル・フーコー「治安・領土・人口」、『ミシェル・フーコー思考集成Ⅶ』、筑摩書房、2000年、368-9頁
79）村上陽一郎『文明のなかの科学』、青土社、1994年、25頁

80）言うまでもなく、ヨーロッパの大学はキリスト教会との関係の中で、長らく歴史が紡がれてきた。パリやオルレアンなど初期の重要な大学は、カトリックの本山学校に起源を持っていたし、学生にも聖職者の数が少なくなかったという。詳しくは、島田雄次郎『ヨーロッパの大学』玉川大学出版部、1990年を参照。

81）ブースの後を継いだウェッブらがオックスフォードやケンブリッジといった伝統校とは一線を画す、「社会科学のための」大学として LSE を設立したという事実も、ここでの議論を裏書きするものであろう。

82）今日の学校教育の一環として行われる「進路指導」も、元はアメリカの“vocational guidance”に起源がある。「神の呼ぶ所まで導く」と聞けば、どのような印象を持つだろうか。因みにヴェーバーが用いだ Beruf（天職）も「呼ぶ招く（berufen）」が原義である。

83）村上、27頁

84）この状況を敷衍すれば、ケトレーやブースの重要性は、〈社会〉の必要にあと押しされた19世紀の科学（目的論的）とヴィクトリア朝的な道徳（倫理主義的）が止揚されることなく拮抗し続けている、という点にあると考えることも可能ではないか。この議論については、我々が次に準備している「〈測定〉の社会学――ケトレーとブース(2)」において扱われる予定である。

85）成定薫・佐野正博・塚原修一『制度としての科学』木鐸社、1989年を参照。

86）Michael Donnelly,“From political arithmetic to social statistics: how some nineteenth-century roots of the social sciences were implanted,”*The rise of the social sciences and the formation of modernity*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1998, p.229

87）荘子『荘子「内篇」』（金谷治訳注）岩波文庫、1971年、69頁

（こいけ　としひこ　国際文化学研究科博士課程前期課程）
（ひらの　りょう　　人間発達環境学研究科博士課程前期課程）

『鶴山論叢』第10号　正誤表

P95　10行目

「大数の法則」や「正規分布」を測用いて×　→　「大数の法則」や「正規分布」を用いて○

P115　平野亮氏の所属

人間発達環境学研究科博士課程前期課程×　→　博士課程後期課程○

P115　注82

因みにヴェーバーが用いだ×　→　ヴェーバーが用いた○

「呼ぶ招く（berufen）」×　→　「呼ぶ・招く（berufen）」○

以　上